



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

19

永井荷風(二)

中央公論社

日本の文学 19

©1965

永井荷風(二)

昭和40年5月25日初版印刷
昭和40年6月5日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 中央精版印刷株式会社製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京31



昭和29年5月19日 八百善にて

撮影 木村伊兵衛



目次

つゆのあとさき	7
あじさい	81
榎物語	93
ひかげの花	102
澤東綺譚	150
浮沈	225
踊子	317
勲章	350

にぎり飯

吾妻橋

偏奇館吟草

深川の散歩

元八まん

葛飾土産

細雪妄評

罹災日録

358

366

374

403

410

414

424

426

注解
解説

武田泰淳

504 480

口絵
挿画

自画像

永井荷風

「つゆのあとさき」「あじさい」

「ひかげの花」「濃東綺譚」

「浮沈」「勲章」「吾妻橋」

木村莊八

「罹災日録」

永井荷風

永井荷風
(二)

つゆのあとさき

一

女給の君江は午後三時からその日は銀座通りのカフエーへ出ればよいので、市ヶ谷本村町の貸間からぶらぶら堀端を歩み見附外から乗った乗合自動車を目比谷で下りた。そして鉄道線路のガードを前にして、場末の町へでも行ったような飲食店の旗ばかりが目につく横町へ曲り、貸事務所の硝子窓に周易判断金龜堂という金文字を掲げた売卜者をたずねた。

去年の暮あたりから、君江は再三気味のわるいことに遭遇していたからである。同じカフエーの女給二三人と歌舞伎座へ行った帰り、シールのコートから揃いの大島の羽織と小袖から長襦袢まで通して袂の先を切られたのが始まりで、その次には真珠入り本簪甲のさし櫛をどこで抜かれたのか、知らぬ間に抜かれていたことがある。掏摸の仕業だと思えばそれまでのことであるが、またど

うやら意趣ある者の悪戯ではないかという気がしたのは、その後猫の子の死んだのが貸間の押入れに投げ入れてあったことである。君江はこの年月随分みだらな生活はして来たものの、しかしそれほど人から怨みを受けるような悪いことをした覚えは、どう考えて見てもない。初めはただ不思議だとはかり、さして気にも留めなかったがついこのごろ、街巷新聞といって、おもに銀座辺の飲食店やカフエーの女の噂をかくあまり性のよくない小新聞に、君江が今日まで誰も知らうはずがないと思っていたことが出ていたので、どうやら急に気味がわるくなつて、人に勧められるがまま、まず卜占をみて貰おうと思つたのである。

街巷新聞に出ていた記事は誹謗でも中傷でもない。むしろ君江の容姿をほめたたえた当たり触りのない記事であるが、その中に君江さんの内腿には子供の時から黒子一つあつた。これは成長してから浮気家業をするしるしだそうだが、果してその通り、女給さんになつてから黒子はいつの間にか増えて三つになつたので、君江さんは後援者が三人できるのだらうと、内心喜んだり気を揉んだりしているということが書いてあつた。君江はこれを読んだ時、何だか薄気味のわるい、まことにいやな心持がした。左の内腿に初めは一つであつた黒子がいつとなく並んで三つになつたのは決して虚誕でない。全くの

事実である。自分でそれと心づいたのは去年の春上野池の端のカッフェーにはじめて女給になってから、しばらくしてのち銀座へ移ったところである。それを知っているのはまだ女給にならない前から今もって関係の絶えない松崎という好色の老人と、上野のカッフェー以来とやかく人の噂に上る清岡進という文学者と、まずこの二人しかないはずである。黒子のある場所がほかとはちがつて親兄弟でも知ろうはずがない。風呂屋の番頭とてそこまでは気がつくまい。黒子の有無は別にどうでもよいことであるが、風呂屋の番頭さえ気のつかないことを、どうして新聞記者が知っていたのだろう。君江はこの不審と去年からの疑惑を思い合せて、これから先どんなことが起るかも知れないと、急に空おそろしくなつて、今まで神信心はもちろん、お御籤一本引いたことのない身ながら、突然占いを見てもらう気になつたのである。

アパートメントの一室を店にしている新時代の売卜者は年のころ四十前後、口髭を刈り洋服を着、鎧甲のロイド眼鏡をかけ、デスクにもたれて客に應對する様子は見たところ医者か弁護士と変りはない。省線電車の往復するのがよく見える硝子窓の上には「天佑平八郎書」とした額を掲げ、壁には日本と世界の地図とを貼り、机の傍の本箱には棚をことにして洋書と帙入の和本とが並べてある。

君江は薄地の肩掛けを取つて手に持ったまま、指し示された椅子に腰をかけると、洋装の売卜者はデスクの上によみかけの書物を閉じ廻転椅子のままぐるりとこちらへ向き直つて、

「御縁談ですか。それとも大体にお身の上の吉凶を見ましょうか。」とわざとらしく笑顔をつくる。君江は伏し目になつて、

「別に縁談というわけでもございません。」

「では、まず大体のことから拝見しましょう。」と易者はあたかも婦人科の医者が患者の容態をきくように、なりたけ気がねをさせまいと苦心するらしい碎けた言葉づかいになり、「占いも見つけると面白いものと見えますしで、いろいろなお客様がおいでになります。毎朝会社のお出かけにお寄りになつて、その日その日の吉凶を見る方もあります。しかしむかしから当るも八卦、当らぬも八卦ということがありますから、凶の卦に当たってもあまりお気におかけなさらん方がよいです。お年はおいくつでいらつしやいます。」

「ちやうどでございます。」

「それでは子の年でいらつしやいますな。それからお生れになつたのは。」

「五月の三日。」

「子の五月三日。さようですか。」と易者はすぐに筮竹

を把^とつて口の中で何か呖^{つぶや}きながらデスクの上に算木^{さんぎ}を並べ、「お年廻^{としめぐり}りは離中^{りちゆう}断^{だん}の卦^{くわ}に当ります。しかし文字通り易の釈義を申し上げても廻り遠くて要領を得ないことになりましょうから、わたくしの思いついたことだけを手短に申し上げて見ましょう。大体を申し上げると、この離中断^{りちゆうだん}の卦^{くわ}に当る方は男女に限らず親兄弟にはなれ友達も至^{いた}って少く一人で世を渡る傾きがあります。それにあなたのお生れになった月日から見ますと、遊魂^{ゆうこん}巽^{せん}風の卦^{くわ}に当ります。これは一時お身の上に変ったことが起つても、その変ったことが追い追元^{おひもと}の形に立ち戻るといふ卦^{くわ}であります。この卦^{くわ}から考えて見ますと、現在のお身の上は一時変ったことの起つた後、追い追^{おひ}いもとのようになつて行こうという間のように思われます。天氣に譬^{たと}えて申し上げれば暴風のあつた後、その名残りがなかなか静まらない。しかし追い追^{おひ}い静かになつて、やがてもとの天氣になろうというその途中だと申したらよいでしょう。」

君江は膝の上に肩掛けを弄^{もてあそ}びながらぼんやり易者の顔を見ていたが、その判断は全くその身に覚えがないことではない。どこか当っているとあるがあるので、何となく気まりのわるいような心持でふたたび伏し目になつた。一時身の上に変つたことがあつたというのは、大方両親の意見をきかず家を飛び出し、東京へ来て、とうと

う女給になったことだろうと思つたのである。

君江が家を出たわけは両親はじめ親類中^{ちゆう}挙^{きよ}つてぜひにもと説き勧めた縁談を避けようがためであつた。君江の生れた家は上野停車場から二時間ばかりで行かれる埼玉県下の〇〇町にあつて、その土地の名物になつてゐる菓子をつくる店である。君江は小学校の友達の中で、一時牛込^{うごめ}の芸者になり、一年たつかたたぬうち身受^{じゆうじゆう}けをされて、人の妾^{めかけ}になつてゐた京子という女と絶えず往来^{ゆきき}をしてゐたので、田舎者の女房などになる気はなく、家を逃げ出してそのまま京子の家に厄介になつた。田舎から迎^{むか}ひの人が来て、二三度連れ戻されてもまたすぐ飛び出す始末。親たちも困りぬいて、君江の我儘^{わがまま}を通させ銀行か会社の事務員になることを許した。

君江は京子の旦那になつてゐる川島という人の世話で、間もなくある保険会社に雇われたものの、これは一時実家へ対しての申しわけに過ぎないので、半年とはつづかず、その後はぶらぶら京子の家に遊んで日を暮しているうち、突然京子の旦那は会社の金を遣い込んだことが露見して検事局へ送られる。京子は芸者に出ていたころのお客をそのまま妾宅^{しやうたく}へ引き込み、それでも足りない時は知合いの待合や結婚媒介^{けいごく}所^{じよ}を歩き廻つて、結局何不自由もなく日を送っているのを、傍で見てゐる君江もいつかこれをよいことにしてその仲間にはいった。しかし何分

にもその筋の検挙がおそろいので、京子はもとの芸者になろうと言ひ出す。君江もともども芸者はどんなものか一度はなつて見たいと思ひながら、鑑札を受ける時所轄の警察署から実家へ問合せの手続きをする規定のあることを知つて、やむことを得ず女給になった。

京子は田舎の家へ仕送りをしなければならぬ身であるが、君江はそんな必要がない。田舎に育つただけそれほど流行の物に身を飾る心もなければ、芝居や活動のような興行物も、人から誘われなかつたが、自分から進んで見に行こうとは思はない。小説だけは電車の中でも拾ひ読みをするほどであるが、そのほかには自分でも何が好きだかわからないと言つてゐるくらいで、結局貸間の代と髪結銭さえあれば、強いて男から金など貰う必要がない。金などは貰わずに、随分男のうままになつてやつたこともあるほどなので、君江は今までいかほど淫恣な生活をして来ても、人からさほど怨みを受けるようなはずはないと思ひ込んでゐる。占者の説明を待つて、「それでは今のところ別にたいして心配するようなことはないんでございますね。」

「御健康はいかがです。現在別におわるいところがないのなら、むしろ近い将来にもさして病難があるとは思われません。現在はただいまも申し上げたように波瀾のあつた後むしろ無事で、いくらか沈滞というような形もあり

ります。御自分ではお氣がつかないでいらつしやるかも知れませんが、何かしら不安で、おちつかないような氣がなさるのかも知れません。しかし易の卦ではただいま申し上げたように一時の変動が追ひ追ひ静まつて行くのですから、これから先たいした事件が起ろうとは思われません。しかし何か御心配なことがあつて、そのことをどうしたらいいかと思ひ召すなら、その特別なことについで、もう一度見直しましょう。それで大抵お心当りがつくだろうと思ひます。」と易者はふたたび筮竹を取り上げた。

「実はすこし氣にかかることがございまして。」と君江は言ひかけたが、まさか黒子のことは明らさまには言ひ出しにくいので、「自分には別に覺えがないんですけれど、誰かわたくしのことを誤解してゐる人がありはしないかと思ふようなことがございます。」

「はい。はい。」と易者は仔細らしく眼を閉じてふたたび筮竹を数え算木を置き直して、「なるほど。この卦は物に影の添ふことを意味します。して見ると、何か御自分でいろいろ思ひすごしをなさるのですな。それがため自然でありますが、時と場合には、それとは反対に影から物の起ることもあります。それゆえまず影をなくすよ

うになされば、自然と物事は落ちつくところへ落ちついて行くわけで。そういうお心持でいらつしやれば、別に御心配には及ばないと思います。」

君江は易者のいうことを至極もつともだと思つと、自分ながらつまらないことを氣にかけていたと、たちまち心丈夫な氣になつてしまつた。それでもまだ何やらきいて見たいような心持がしながら、しかしあまり微細なことまで問ひかけて、それがため現在の職業はまだしものこと、二三年前京子と二人で待合や媒介所を歩き廻つたことまで知られてはと、底氣味のわるい心持もする。猫の死骸や櫛のなくなつたこともきいて見ようとは心づきながら、カフエーへ行く時間が氣になるので、今日はそのまま立ち去ろうと考える、

「失礼ですが、お礼は。」といいながら帯の間へ手を入れる。

「一円いただくことにしてありますが、いかほどでも思召してよろしいのです。」

出入口の戸があいて、洋服の男が二人無遠慮に君江の腰をかけているすぐ側の椅子に坐つたのみならず、その一人はぎょろりとした眼付きの、どうやら刑事かとも思われる様子に、君江は横を向いたまま椅子から立つて、易者にも挨拶せず、戸を明けて廊下へ出た。

建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡つた日か

げに、日比谷公園から堀端一帯の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの中から流行の衣裳の翻えるのが目に立つて見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通りぬけて、数寄屋橋のたもとへ来かかると、朝日新聞社を始め、おちこちの高い屋根の上から広告の軽氣球があがつているので、立ち留る氣もなく立ち留つて空を見上げた時、後から君江さんと呼びながら馳け寄る草履の音。誰かと振り返れば去年池の端のサロニラックで一緒に働いていた松子という年は二十一二の女で。その時分にくらべると着物も姿もずつとよくなつてゐる。君江は同じ経験からすぐに察して、

「松子さん。あなたも銀座。」

「ええ。いいえ。」と松子は暖味な返事をして、「去年の暮、しばらくアルプスにいたのよ。それから遊んでいたの。だけれどまだどこかへ出たいと思つて実はこれから五丁目のレーニンつていう酒場。君江さんも御存じでしょう。あの時分ラックにいた豊子さんがいるから、ちょっと様子を見て来ようと思つてゐるの。」

「そう。あなた、アルプスにいたの。ちつとも知らなかつたわ。わたしはあれからずっとドンフワンにいるわ。」
「この春だったか、アルプスでお客様から聞いたことがあつたわ。お逢いしたいと思つてもつい時間がないでしょう。あの、先生もお変りがなくつて。」

君江は小説家清岡進のことにちがいないとは思ひながら、数の多いお客の中には、弁護士^{ひんごし}の先生もあれば、医者^{いしや}の先生もあるのです、それとなく念を押すに若くはないと、「ええ。このごろは新聞のほかには映画や何かで大変おいそがしいようだわ。」

松子はこれを何と思ひちがひしたのか、「アラ、そう。」といかにも感に打たれたらしく深く息を呑んで、「男はいざとなると薄情ねえ。わたしもいい経験をしたのよ。だから今度は大いに発展してやろうと思つてゐるのよ。」

君江は心の中で高が五人か十人、数の知れた男のことを大層らしく経験だの何だのと言うにも及ぶまいと、可笑しくなつて来て、からかい半分、わざと沈んだ調子になり、「あの先生には立派な奥様はあるし、スターで有名な玲子^{れいこ}さんがあるし、わたし見たような女給なんぞは全く一時的の慰み物だわ。」

橋を渡ると、人通りは尾張町^{おちやう}へ近くなるに従つて次第に賑かになる。それにもかかわらず松子は正直な女と見えて、たちまち激した調子になり、「だって、玲子さんが結婚したのは、先生が君江さんを愛したためだつていう評判よ。そうじゃないの。」

君江はあたりをはばからぬ松子の声に辟易^{へきえき}して、「松子さん。そのうちゆつくり会つて話しましょうよ。何なら、ちよつとお寄んなさいな。ドンフワンでも募集して

いるから紹介してもいいわ。」

「あすこは今幾人^{いくた}いて。」

「六十人で、三十人ずつ二組になつてゐるのよ。掃除はテーブルも何もかも男の人がするから、それだけ他^{ほか}よりも楽だわ。」

「一日に幾番くらい持てるの。」

「そうねえ。このごろじゃ三ツ持てればいい方だわ。」

「それで、綺麗^{きれい}を張つたら、かつかつねえ。自動車だつて一度乗ると、つい毎晩になつてしまふし……。」

君江はこまこました世智^{せち}辛^{がら}いはなしが出ると、他人のことでもすぐに面倒でたまらなくなる。それにまた、金なんぞはだまつていても無理やりに男の方から置いて行くものと思つてゐるので、人込みの中に隔てられたまま松子の方には見向きもせず、日の光に照りつけられた三越の建物を眩^{まよ}しそうに見上げながら、すたすた四辻^{よつじ}を向う側へと横ぎつてしまつたが、少しは気の毒にもなつて後を振り返つて見ると、松子は以前のところに立ち止つたまま、挨拶のしるしに遠くからちよつと腰をかがめ、それでもう安心したという風で、これもたちまち人通りの中に姿を没した。

二

松屋呉服店から二三軒京橋の方へ寄つたところに、表